

## 小山昌久教授と国際関係学部の12年

2006年4月、日本政策投資銀行国際協力部長の職を辞されて、立命館大学国際関係学部の同僚となられた小山昌久教授は、2018年3月末をもって定年退職されます。本号はその記念のために刊行されるものです。

この12年間、小山先生は、開発金融機関における豊かな実務経験にもとづいて、国際関係学部・研究科の開発・国際協力関連の科目担当、院生指導に献身されました。また、学部・研究科を越えて、2008年度から2010年度まで、立命館大学国際部長の重責を担われました。そして、退職直前の2年間、2016-17年度は、国際関係研究科長として、研究科の充実に尽力されました。

小山先生は、日本政策投資銀行時代から、ASEAN諸国、メコン流域国の開発・国際協力を携わっておられ、そのご経験が国際関係研究科における院生受け入れ政策——国費外国人留学生の獲得——につながっていったと思います。文科省、JICA等と連携して外部奨学金を獲得し、積極的にアジア、アフリカ、ラテンアメリカから留学生を受け入れる現在の研究科の方向性は、小山先生のリーダーシップによるところが大きいです。小山先生は、学部のグローバル化とはまた違った位相で、研究科のグローバル化の推進に多大な貢献をされました。小山先生のご退職のあと、研究科を持続的に発展させていくことはわれわれの課題であります。

国際関係学部・研究科への小山先生のご貢献といえ、他の実務家教員の方々と結成されたバンド、NIKON（長須、石原、小山、岡田、中川亮平の諸先生）で、IRナイトを盛り上げてくださったことも忘れることができません。

わたしの個人的な思いを書かせていただくならば、教授会・研究科委員会あるいは執行部会議で、小山先生が「堅気の職業人」としての視点——いわば「穏和なリアリズム」——で発言されたことが、「常識批判を旨とする研究者」の議論では欠けがちな側面を補正することになり、それが結論の適切さ、適正さを担保したという経験が強く記憶に残っています。

あらためて12年間におよぶ小山先生の国際関係学部・研究科、立命館大学全体へのサービスに心から感謝申し上げます。特任教授となられたあともご指導ご鞭撻をお願いいたします。そして、お元気でなお一層ご活躍されますよう祈念いたします。

立命館大学国際関係学部長 君島 東彦

